

## ひきこもり状態を呈した女性の生涯発達過程に関する事例研究 関係性の観点から

立命館大学応用人間科学研究科  
臨床心理学領域

本研究では近年注目を集めているひきこもりについて女性の事例を取り上げ関係性という観点から捉え直すことで、その理解と援助の新たな方向性を探るものである。

ここではひきこもりを 自宅へひきこもって家族以外の一般対人関係を遮断していること、統合失調症などの特別の精神障害に由来する退却ではないこと、ひきこもりをはじめ6ヶ月以上が経過していること、と操作的に定義する。このようなひきこもりは男性に多く女性の事例は少ないが、筆者がひきこもりの家族会や女性だけの自助グループに参加してきた経験から、ひきこもりの女性が事例化しにくいことは適切な援助を得る機会を奪うことになるのではないかと懸念した。そこで本研究では少数派である女性を事例として取り上げ、ひきこもり経験を有する3名に対してインタビュー調査を行い、女性の生涯発達を理解する上で重要な関係性という観点から分析・考察を加える。それによってひきこもりの女性に対する理解と援助のあり方を明らかにし、さらにひきこもり全体における問題点の検討を目的とした。

分析の結果、事例の3名はそれぞれアイデンティティ形成の課題において個の確立が優位である場合と関係性の維持が優位の場合があると考えられた。

1 事例目のA氏の場合、父親の情緒的不在と母娘間の結びつきの強さ・過剰な同一視により、彼女は主体性を培うことが不十分であり、大学進学によって自由な場に放り出され戸惑ったゆえに何も選択しないというひきこもり状態を呈した。彼女の優先課題は主体性、個の確立であると考えられる。それだけでなく彼女はアルバイトを通じてコミュニケーションの重要性に気づき、他者との関係の中で自己が変化するという新しい発達の方向へと広がっており、アイデンティティ形成の試みは着実に進んでいることが見出された。

2 事例目のB氏は幼少期から自分の力で対処するという有能感がもてず、問題に直面した時には他者へ依存することでそれを回避する、依存する他者がいない場合はひきこもるといった回避パターンを繰り返してきた。彼女はパワーのある母親に比べて「自分は弱くてダメな人間」と認識しており、結婚することで夫に依存しその関係の中に自己を見つけようとする。ところが、B氏の他者配慮は自己犠牲的なものにすぎず、自己が不安定になるという結果になっている。彼女には問題に直面する時の痛みを引き受ける主体として自己を感じる必要があるとあり、個の確立を伴った時、彼女の関係性に基づくアイデンティティはより成熟したものになると考える。

3 事例目のC氏は有能性や生産性という父親の価値観を取り入れ、その象徴でもある兄と比べて自分には能力がないと劣等感を抱いてきた。その背景には重要な他者にコミットしケアするという母親の価値観が現代社会では評価されにくく否定的に感じられたことがあげられる。C氏が就職活動を前にして男性中心の現代社会によく合致した価値観をより強く意識したと同時に、家庭内では祖母の介護というケアが問題に上がっており、彼女の価値観は大きく揺らぎその不安定感からひきこもり状態を呈した。彼女の課題を克服する

にはこれまでの積極的な自己実現に向かう個の確立だけでなく、関係性の維持に取り組む必要があり、それはより柔軟なアイデンティティを発達させるために重要な課題となる。

男性中心である現代社会の価値観とそれを反映して自律と達成に価値をおく発達観ではアルバイトや専業主婦の彼女たちは十分に適応していると見なされてしまうが、筆者はそのような捉え方は有効でないと考える。ひきこもりは生き方の見直しを迫る問題でありアイデンティティの発達を意識して援助しなければならない。そのためにはこれまで価値を置かれてきた個の確立という側面だけでなく、女性に特徴的な関係性という視点から彼女たちの生涯発達過程を捉え直す必要があると考える。それによってひきこもりの女性のアイデンティティ形成をより理解することができ、その発達を促進するかかわりができよう。

さらに、本研究ではひきこもり全体への理解と援助における問題点が浮かび上がってきた。それは男性のひきこもりにおいても従来の発達観に基づいて論じることが適切とは言えないという点である。従来の発達観でひきこもりを捉えれば精神的・経済的自立が目標とされ、それを就学・就労という形で解決しようとする。しかし、その発達観からでは直線的・段階的な発達過程を前提とするために、ひきこもりによる経歴の「空白」を無駄な時間とし、ひきこもりの本人や家族に焦燥感や負い目、絶望感を感じさせることになるのではないか。ひきこもりを意味ある時間として経験し自らの生き方を見直すためには、まずこの焦燥感や負い目、絶望感から解放される必要がある。その視点となるのが関係性という方向からのアイデンティティ発達の理解であると考えられる。関係性に基づくアイデンティティ形成は直線的な過程ではなく、人生のどの時点でもどの方面からでも「自分らしさ」のあり方に取り組むことができるものであり「空白」の時間が生じることはない。人間の発達においては個の確立だけではなく、関係性という側面も同じくらい価値を持つ。この関係性からの視点は男性中心の現代社会に合致した精神的・経済的自立への強迫的な発想から抜け出してひきこもりを意味ある時間として捉えることを可能にし、ひきこもりに対する理解と援助のあり方に広がりをもたらすと考える。